

小菅 優 ピアノリサイタル

- 組曲 第7番 ト短調 HWV432 ヘンデル
ソナタ 第42番 ニ長調 Hob.XVI-42 ハイドン
ソナタ 第23番 ヘ短調 Op.57「熱情」 ベートーヴェン
24の前奏曲 Op.28 ショパン

夏

四季コンサート 2005

2005年6月15日(水)6:45 PM

会場: 浜松市教育文化会館

主催: 浜松音楽友の会

プロフィール

1983年東京で生まれ、1993年よりヨーロッパ在住。9歳よりリサイタルやオーケストラと共に演奏、ヨーロッパに住み研鑽を積みながら次々と演奏活動を重ね、その足跡はベルリン、ハンブルグ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、パリ、アムステルダム、ブリュッセル、チューリッヒ、モスクワ、米国など、年に40カ所以上に及ぶ。現在ヨーロッパで、その高度なテクニックと美しい音色、深い楽曲理解と若き感性で最も注目を浴びている若手ピアニストの一人である。2000年、ドイツ最大の音楽批評誌「フォノ・フォルム」よりショパンのエチュード全曲録音に5つ星が与えられたほか、2002年には第13回新日本音楽賞を、2004年にはアメリカ・ワシントン賞を受賞している。これまでに、NHK交響楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団、札幌交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団、モーツアルテウム管弦楽団、フィルハーモニア・フンガリカ、ニーダーザクセン国立オーケストラ、NDR放送交響楽団、サンクトペテルブルク交響楽団、ラジオ・フランス交響楽団などのオーケストラと、またルドルフ・バルシャイ、デニス・ラッセル・ディヴィス、ゲルト・アルブレヒト、アレクサンダー・ドミトリエフ、チョン・ミョンファンなどの各氏と共に演奏している。また、ザルツブルク音楽祭、ラインガウ音楽祭、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭、オランダ音楽祭、フランス国際ピアノ音楽祭などから招待を受け出でている。

小菅 優
ピアノリサイタル



YU KOSUGE
PIANO RECITAL

曲目解説

真嶋 雄大

●ヘンデル (1685~1759) / 組曲 第7番 ト短調 HWV432

未だ全貌が明らかになっていないヘンデルの「クラヴサン」組曲ではあるが、これは1720年にジョン・クリュアがロンドンで出版した第1集と呼ばれる全8曲中第7番目の曲。まず莊重なグラーヴェを持つフランス風序曲から曲が開始され、やがてフガートからのプレスト部分に移る。続くアンダンテとアレグロは同じテーマに基づいて対を成し、サラバンドはヘンデルのオペラ「リナルド」のアリアを引用している。短いジーグから華やかなパッサカリアとなって曲を閉じる。

●ハイドン (1732~1809) / ソナタ 第42番 ニ長調 Hob.XVI-42

ハイドンのピアノソナタは、正確には殆どチェンバロ・ソナタである。最後期の5曲のみ「フォルティピアノのために」と記されているが、それが全部で一体何曲あるのか今もって把握しきれてはいない。未発見のもの、編曲もの、或いは偽作などが入り組んでいるためだが、その中にあって1880年~82年頃の作曲とされるこの曲は、ピアノでよく演奏される作品のひとつである。

優しく穏やかなテーマから始まる第一楽章は変奏楽章として発展し、人間の感情を巧みに描いてそれが徐々に熱狂的になったり、また愛くるしい表情になったりと、さまざまな側面を見せて興味深い。対して第2楽章は至って短く、爽やかに終結する。

●ベートーヴェン (1770~1827) / ソナタ 第23番 ヘ短調 Op.57「熱情」

出版社によって付けられたタイトルだが、的確に内容を言い当てている。圧倒的なバトス、暴風雨を伴う前後の楽章、その間に横たわる束の間の安らぎ、その音楽的造形の見事さ、緻密に計算された感情の吐露は、著しい感興を生み出さずにはいられない。歌劇「フィデリオ」の直後、1805年頃に完成されたと考えられている。

第1楽章へ短調：「運命の動機」と呼ばれるモチーフに終始支配されている。第2主題とともにそれが形を変え展開し、巨大なコーダの後静かに幕を閉じる。

第2楽章変ニ長調：主題と変奏による深い情感を伴った楽章。

第3楽章へ短調：うねるような主張と尽きることのない、滾(たぎ)るような激情に彩られている。

●ショパン (1810~1849) / 24の前奏曲 Op.28

これほど短く簡潔で、なお凝縮した完成度を有している作品はそうあるものではない。確かに無作為性を感じさせる断片的なスケッチ風でありながら、実はショパンの複雑な心象風景を音楽に投影した独創的な24曲の集合体であり、同時に有機的な必然性を持って深く結合している。そこにはショパンが常に抱いていた病氣への不安、安らぎと失意、苛立ちや焦燥感などの交錯を、そのまま長調と短調の対比等として音楽に結晶させた劇的なドラマと、目眩めくイマジネーションが明確に存在している。

24曲は平均律における全ての調性を用いて書かれた。配列としては5度循環形式を探っており、まずハ長調を起点として次に平行調のイ短調、その次に完全5度上のト長調とホ短調という並びになっていて、一般にジョルジュ・サンドとのマヨルカ島への逃避行前後、1836年から39年にかけて作曲されたといわれている。

第1番ハ長調：即興的であり、生命力に満ちた優美な曲。第2番イ短調：鬱然として重苦しい和音に、立ちすくむような旋律が繰り返される。第3番ト長調：輝かしい陽光を賛美するかのよう。第4番ホ短調：ショパン葬儀の際に演奏された、暗く優美な曲。第5番ニ長調：アラベスクを思わせるリズム。第6番ロ短調：繊細かつ翳りを秘めた、思索的な作品。第7番イ長調：夢見るようなマズルカ風。CMでもお馴染み。第8番嬰ヘ短調：独創的な音形と巧みな装飾。第9番ホ長調：端然と運ばれていく構成は力強い。第10番嬰ハ短調：下降していく音型が印象的。第11番ロ長調：限りない憂いが秘められた作品。第12番嬰ト短調：毅然としたショパンの想いが宿っている。第13番嬰ヘ長調：繊細な夜想曲を思われる。第14番変ホ短調：暗澹たる熱情が湛えられている。第15番変ニ長調：「雨だれのプレリュード」として広く知られる。第16番変ロ短調：奔流のごとくファンタジーが押し寄せる。第17番変イ長調：歌謡的で甘い旋律。第18番ヘ短調：緊張感に支配された劇的な作品。第19番変ホ長調：いかにも自然な息遣い。第20番ハ短調：葬送行進曲を思われる重々しい作品。第21番変ロ長調：詩的で調いのある旋律は清冽。第22番ト短調：ストレートに暗い激情が進る。第23番ヘ長調：爽やかな薰風が吹き抜けていくような作品。第24番ニ短調：終幕を飾る壯麗で堂々たるクライマックス。